

自己教育力を高める実習ポートフォリオを用いたピアリフレクション —継続的な学習支援の成果と課題—

江崎ひろみ, 松井美由紀, 窪田志穂, 香川里美, 伊藤美香, 仲田琴美, 野村美千江

愛媛県立医療技術大学紀要 第17巻 第1号抜粋

2020年12月

自己教育力を高める実習ポートフォリオを用いたピアリフレクション —継続的な学習支援の成果と課題—

江崎ひろみ, 松井美由紀, 窪田志穂, 香川里美, 伊藤美香, 仲田琴美, 野村美千江

Reflection with Peers Making Use of the Portfolio for Clinical Practice to Cultivate Self-education Ability — Outcomes and Problems of Our Continual Learning Supports —

Hiromi EZAKI, Miyuki MATSUI, Shiho KUBOTA, Satomi KAGAWA,
Mika ITO, Kotomi NAKATA, Michie NOMURA

Keywords : 実習ポートフォリオ, 自己教育力, ピアリフレクション

序 文

看護基礎教育において、学生の自己教育力醸成のためのポートフォリオを用いたプロジェクト学習の報告¹⁻⁴⁾は多く、ポートフォリオを活用することによって、学習プロセスを可視化し自らの成長を評価できる^{5,6)}等、様々な学習効果が報告されている。本学看護学科では2016年8月に、看護実践能力獲得に向けた学習へのモチベーションを高め、自己教育力を醸成することに役立てたいとの思いから、学生有志と教員が協働して、実習ポートフォリオ『医技diary』(以下、実習PFとする。)を作成し導入した⁷⁾。実習PFのシートは、学生が継続的に書き溜めていくことで、看護実践経験や学びを可視化し、看護実践能力獲得の軌跡が俯瞰できる。

しかし、実習PFの継続的な活用については、先行研究⁸⁾で、学生の主体性だけではポートフォリオの記載や活用は不十分であり、継続的な支援体制が必要であるとの報告がある。そのため、本学では実習PF導入の翌年から、実習PFを用いて看護技術経験をピアレビューし、学生同士の語らいの中でピアリフレクションする授業(以下、ピアリフレクションとする)を行ってきた。ピアリフレクションは、過去の実習を振り返り本人に記述や口頭で語らせることによって、技術の発達を自己評価することができる⁹⁾とされている。また、本学の既報では、学生主体のグループミーティングの中で、4年間に積み上げた看護技術の上達を確かめることで成長を実感する¹⁰⁾との報告があり、学生主体のピアリフレク

ションは効果的である⁷⁾と考えられた。これらのことから、継続的かつ全領域横断的に実習PFを用いたピアリフレクションを実施し、学生同士で看護技術の積み上げ学習の成果を確かめることを授業のねらいとした。

ピアリフレクションに関する既報は、各領域別の取り組み¹⁻⁴⁾が多く、4年次までの継続的かつ全領域横断的なピアリフレクションの実践報告は少なく、その学習効果について知見の蓄積が求められる。そこで本稿は、基礎看護学実習開始から継続的かつ全領域横断的に実習PFを活用し、ピアリフレクションを導入した取り組みを報告し、継続的な学習支援の成果と今後の課題について考察することを目的とする。

用語の定義

1. 自己教育力：1983年文部科学省中央教育審議会において、自己教育力の用語が初めて用いられ「主体的に、学ぶ意思、態度、能力」と定義され、自己教育力とは学習への意欲であり、学習の仕方の習得であり、生き方の問題にかかわるものであるとしている¹¹⁾。
2. ポートフォリオ (Portfolio)：ロンドン大学のS.クラークらが開発した総合的学習の評価方法であり、自分で学習目標を設定し、その目標に到達するまでのプロセスで学んだものを学習成果物として、目的・計画的に長期にわたって蓄積し、それを評価に活用するものである^{5,6)}。
3. ピアリフレクション：学生同士の間で行うグループ

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

レベルのリフレクション活動とする。

4. ピアレビュー：一般的には同じ専門分野の人の中で、成果物や業績を別の人が詳細に評価するシステム¹²⁾で、学生同士の間で、記録を見せ合い、他の学生からの助言を取り入れ、自分の着目した現象をより詳しくわかりやすく記述、またはその現象に含まれる別の意味に気が付く⁹⁾こととする。

方 法

1. 実習PFを用いたピアリフレクションの概要

1) 授業科目としてのピアリフレクションの位置づけ

ピアリフレクションは、必修科目「技術特論」内に位置づけられている。「技術特論」は、履修時期が3年次後期から4年次前期で、1単位30時間15回の授業である。「技術特論」の授業目標は、看護実践能力の獲得に向けて既習の知識と技術を統合し、実践に近い状況設定において状況判断からケア提供までの一連のプロセスを模擬展開することによって、判断力・技術力を高めること、さらに、実習PFを用いて卒業までに習得すべき看護技術項目を確認し、看護実践能力の獲得に向けて残された自己の課題とその対処法を明確にすることである。この目標を達成すべく授業計画は、①3年次領域別実習前に、実習PFを用いたピアリフレクションにより習得すべき看護技術の確認と技術演習計画立案、②技術演習実施、③4年次総合実習前に、実習PFを用いたピアリフレクションによる自己成長並びに課題と対処の確認の3項目で構成されている。

「技術特論」の担当は、看護学実習を担当する看護学科教員である。このうち、ピアリフレクションの担当は、「技術特論」を運営する技術教育ワーキングの教員5名（基礎看護学講座、地域精神看護学講座、成人老年看護学講座、母性小児看護学講座）と科目責任者である。また、すべての実習を終えた学生有志数名（実習PFの活用とその説明意義に賛同した看護学科4年生）に協力を依頼している。

2) 授業展開

(1) 2年次の実習PF導入オリエンテーション

ポートフォリオが有効に活用されている大学では、学生同士による支援体制が充実している⁸⁾との報告があり、実習PF開発の当初から、学生の視点を活かしたガイダンスや具体的な活用方法を示した指南書、応援メッセージを取り入れている。上級生からの働きかけは、実習PFに対する教員からの「与えられ感」を軽減し⁷⁾、実習PFを活用し実習へのモチベーション向上に繋げる意図がある。これらのことから実習PFの導入オリエンテーションは、2年次基礎看護学実習Iの前に、教員と

4年生有志で行っている。

実習PF導入オリエンテーションでは、教員は実習PFの目的と意義について、実習PFは自分の学習の過程を自ら記録しファイリングすることで、経験したことを振り返る際に自分だけの資料となること、自分の思いを自由に残すことができる学習支援ツールであることを伝えている。また、看護技術習得の到達度の情報は、看護技術習得支援のため教員と共有することを説明している。4年生有志は、事前準備として、各自の実習PFの活用状況を省察し、継続して使用する工夫について教員と協議している。また、実習PFを見返し全ての実習を乗り越えた思いを「先輩からのメッセージ」として寄稿している。これらの事前準備をしたうえで、2年生に向けて実習PFの継続的活用の意義と有用な活用方法の説明を行っている。具体的には、各シートの良い点と実習中にどのような内容を簡潔に書き溜めていったのか、看護を経験した疾患や薬剤について学習した成果物をファイリングすることなど、自分が実際に使用したシートを示しながら2年生へ説明を行っている。説明を受けた2年生は、4年生の具体的な経験やシートの活用法を参考に自分の取り入れやすい方法の選択肢を得ている。

(2) 3年次、4年次と繰り返したピアリフレクション

3年次の領域別実習前（10月）、4年次の総合実習前（7月）の時期に90分間のピアリフレクションを行っている。グループ編成は、次の領域別実習グループ別に、学生を4～6名に編成している。ピアリフレクションの方法は、はじめに①これまでの看護経験の中で印象深いこと、成長を実感した経験を付箋に書き出す。過去の実習を振り返る資料として、経験した看護技術項目別に到達度を記した「看護技術経験シート」、看護技術実践場面を取り出し具体的に対象・状況・方法を記載した「実践力ステップアップレコード」を用いている。次に、②印象に残る看護経験を記載する「My Nursing Roadシート」に、記入した付箋を経過が分かるように追加して貼付してもらう。2年次、3年次、4年次と繰り返しひとつのシートに書き溜めていくことで、基礎、領域別実習の過程を可視化し実習全体を俯瞰できるようにしている。そして、③このシートを基に各々の看護経験について自由に語り合い、分からないことや知りたいこと、工夫した内容をより詳しく質問する。最後に、④学生は互いに手書きの応援・承認メッセージを渡すことで他者承認を行う。

2. 調査方法

(1) 調査対象および方法

調査対象となる授業参加者は、平成30年度の授業科目「技術特論」を受講した学生77名とする。

調査期間は2019年7月、科目終了時に無記名自記式のアンケート調査を実施した。

調査票の作成は、平成30年度卒業生を対象とした実習PFに対する取り組みの実態調査¹³⁾を参考に技術教育ワーキングで独自に作成した。

調査項目は、実習PFを使用した評価として、実習PFを使用することで実感できた内容（8つの選択肢、複数回答）とし、ピアリフレクションに参加した評価として、①実習体験を振り返る機会としてのピアリフレクションの役立ち感（4件法）、②ピアリフレクションで新たに得た気づきの内容（自由記述）③ピアリフレクションの開催時期（4件法、適切でない理由を記述）、④実習PFを用いたピアリフレクションについて改善してほしい内容（自由記述）とした。

分析は、各質問項目の回答数を単純集計し分布割合を比較した。自由記述の内容は、学生の記述文章を原文の意味を損なわないように要約し（コード）意味の類似性で分類・整理しまとめ、抽象度を上げカテゴリー化した。これらの質的分析過程では、研究者の意見が一致するまで繰り返し検討し、真実性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

ピアリフレクションに関する学生評価は、この科目の成績評価を行った後、無記名自記式質問票にて収集した。個人情報の保護、匿名性の保持を厳守すること、提出は自由意思で決めてよいこと、この科目の成績評価には反映されず不参加であっても不利益は被らないことを口頭で説明した。個人が特定されないように教室の外に設置した回収BOXに自由投函とし、投函をもって同意を得たものとした。

結 果

調査票を77票配布し、75票（回収率97.4%）を回収した。有効回答票は74票（有効回答率96.1%）であった。

1. 実習PFを使用した実感（複数回答）

実習PFを使用することで実感できた内容は、8つの選択肢のうち回答数の多いものから順に、「自分の経験を一連の過程として客観的に見ることができた」36名（48.6%）、「成果や成長を感じ、自己課題が分かった」29名（39.1%）、「自分の看護観を他者に伝える際に役立った（面接やエントリーシート作成時）」22名（29.7%）、「自己効力感やモチベーションが高まった」13名（17.6%）、「今後の目標を立てることができた」11名（14.9%）、「自分がなりたい将来像を描くことができた」7名（9.5%）、「実感できたものはない」4名（5.4%）であった。「その他」4名（5.4%）として、「具体的な場面について振り返る機会となった」、「今まで忘れていた自分が行った看護

を思い出すことができた」、「他の人からみた自分についても振り返れた」、「メッセージツリーの言葉に励まされた」があった。

2. 実習体験を振り返る機会としてのピアリフレクションの役立ち感

ピアリフレクションは実習体験を振り返る機会として役立ったかは、「とても役に立った」13名（17.6%）、「まあ役に立った」53名（71.6%）を合わせて89.2%が役に立ったと回答した。「あまり役に立たなかった」6名（8.1%）、「役に立たなかった」2名（2.7%）を合わせて10.8%が役に立たなかったと回答した。

3. ピアリフレクションで新たに得た気づき

ピアリフレクションで新たに得た気づきの自由記述は31件で、記述内容からコード数34を得た（表1）。ピアリフレクションの成果として、4つの【カテゴリー】、12の《サブカテゴリー》を抽出した。【自ら学びを積み重ねながら成長する過程を実感する】は、《忘れかけた実習の学びを想起させる》《実習で多くを学んだことを実感する》《自身の成長過程を知る》で構成された。【自分の変化を見出し自ら評価する】は、《看護技術の引き出しが増えたことを実感する》《課題だと感じたことを想起する》《頑張った自分を認める》の3つのサブカテゴリー、【他者との共有から経験した看護を価値づける】では、《他者の体験を重ねて新たな課題を見出す》《他者の経験の共有から知識を得て自分の看護に活かす》《他者の意見を得て自分の看護を意味づける》《他者承認により自己効力感が高まる》の4つのサブカテゴリーで構成された。【自ら目指す看護観を醸成していく】は、《自分が大切に思う看護観に気づく》《体験を言語化して残す必要性を理解する》で構成された。

4. ピアリフレクションの開催時期

3年次・4年次のピアリフレクションの開催時期については61名（82.4%）が「適切」とし、「適切ではない」11名（14.9%）、「どちらともいえない」2名（2.7%）であった。適切でない理由には、「実習の記憶が鮮明なうちに記入の時間を確保してほしい」、「3年の10月では、あまり自分の頑張りを思いだせないで、基礎Ⅱの実習が終わってすぐが良い」、「4年次の7月では就活と被っているので、もう少し早めてほしい。」といった意見があった。

5. 実習PFとピアリフレクションをより有意義にする改善点

自由記述は10票で、記述内容を分類すると、学生が求める実習PFの活用について「もっと記入する時間が欲

表1 学生の気づきから明らかになったピアリフレクションの成果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
自ら学びを積み重ねながら成長する過程を実感する	忘れかけた実習の学びを想起させる	時間が経って忘れかけていた実習時の学びを振り返るきっかけとなった
		領域別実習の経験をふり返り、自分の学びとして実感することができた
		実習での自分の取り組みを思い返せた
		これまでの実習で得た学びを振り返ることができた
	実習で多くを学んだことを実感する	領域別実習や基礎実習で、意外と学びを得ていたのだなと気付いた
		領域別実習を改めて振り返る機会となり、学ぶことが多かった期間だったと気づいた
		記入項目が多いなーと感じた
		自分の学び以外にも聞くことで、確かに自分もこんな経験があったと思ひ出せた
	自身の成長過程を知る	自分自身のことを振り返ることができた
		自分の成長過程が良く分かった
		成長が目に見えるのでいいと思った
		実習で意外と成長しているんだなと思った
自分の変化を見出し自ら評価する	看護技術の引き出しが増えたことを実感する	各実習で自分がそのような工夫をしていたかを実感する
		自信のある看護技術の引き出しが増えたと実感する
	課題だと感じたことを想起する	自分が領域別実習で課題だと感じたものを思い出すことができた
		自分が思っていた以上にがんばっていたことに気づけて良かった
	頑張った自分を認める	よくがんばったと思った
		これまでの実習について振り返ることで、自分が頑張ってきたことについて改めて気付けた
他者との共有から経験した看護を価値づける	他者の体験を重ねて新たな課題を見出す	自分の経験に他者の体験を重ねることで新たな課題を見出す
		他の学生の学びを知れたのは参考になった
		他の人が実践した看護を知ることで自分の看護にも活かせると思った
		自分が行かなかった病棟やそこでの工夫について知ることができた
	他者の経験の共有から知識を得て自分の看護に活かす	他の人の実習の話聞いて総合実習で生かせる部分は生かしていきたいと思った
		皆の体験を聞いて良かった
		グループメンバーの実習での経験について聞くことで自分にはなかった患者との関わりや支援方法について知ることができた
		他の人の経験を知ることができ、自分も取り入れたいなと思うものが多くあった
	他者の意見を得て自分の看護を意味づける	他メンバーの意見をもらうことで、自分の看護の意味を気づけた
		グループなど複数でディスカッションする際に他者の経験を聞くことで自分のことも振り返ることができた
		他の人の体験を聞きながら、自分の経験を振り返ることができた
		人に見てもらえることで、「これは良かったんだ」と自分の看護に自信を持った
他者承認により自己効力感が高まる	学生ががんばったことについて知れた	
	客観的にみて自分が何を大切に看護をしているのかを気づくことができた（患者・家族との信頼・安心感・何が必要か）	
自ら目指す看護観を醸成していく	自分が大切に思う看護観に気づく	各実習で自分が工夫した看護技術の中に、自分が目指す看護を見出した
		体験を言語化して残す必要性を理解する
		自分が体験したことを振り返って言語化して残すのは大切だ

しい、「提出しなくても教員から何も言われないので忘れがちになる」、「どの実習でも使うように促して欲しい」2名、「教員が実習PFの共有を統一すれば、書く習慣が付く」、「指導教員のメッセージは読み返すことでモチベーションが高まることに繋がる」という意見があった。ピアリフレクションに関しては、「具体的なエピソードを思いだすのに時間がかかるので、実習直後に振り返る時間があったら良い」、「領域別実習のグループで行う方が、『あの時頑張ったよね』と共有しやすい」、「特になし」という意見があった。

考 察

1. 実習PFを継続的かつ全領域横断的に使用した成果

実習PFを基礎看護学実習から継続的かつ全領域横断的に使用した結果として、学生の半数は「自分の経験を一連の過程として客観的に見ることができた」、4割の学生は「成果や成長を感じ、自己課題が分かった」と回答した。これは実習PFの記述を通して、学生は、自己対峙しながら自分自身や自分の行為に意味づける「個人レベルのリフレクション」¹⁴⁾が行えたことを示している。また、面接や就職時に「自分の看護観を他者に伝える際に役立った」という回答もあり、田村らが述べるように「自己対峙によって、自分の看護に対する考え方の特徴や価値観の所在について気付いていく」¹⁵⁾ことで、自分の看護観として確かめられたと推察する。これらの成果は、学生が実習PFに看護に対する考え方など自由に表現できるよう、全領域の教員が継続的に学生を支援し、学生と共有したことをフィードバックすることでさらに明確になる。

以上のような成果を生み出す取り組みとして、実習PFの「看護技術経験シート」に看護技術の到達度を記すことや、看護実践場面を取り出し具体的に対象・状況・方法と次の課題を記載するシートを継続的に全領域の実習で使用したことが考えられる。また、継続的に使用するために、技術教育ワーキングの教員が中心となって、実習ガイダンスやピアリフレクションを活用して定期的な記載活用機会を設定し、シートの記載漏れの防止や記載方法の教示を繰り返し行ってきたことも成果を生み出した取り組みといえる。

一方で、「今後の目標を立てることができた」、「自己効力感やモチベーションが高まった」学生は2割弱と少なく、個人リフレクションでは不十分な一面がみられた。これは、すべての実習が計画的な積み上げ学習であり、その学習の軌跡を自分で記録に残すといった実習PFの目的やその効果について十分な理解がないまま使用している結果と考える。Langanらの指摘にあるように、学生にとって記載に費やした時間と対価に大きな不

均衡があるとみなされれば、学生のリフレクティブな分析が、性急で貧しいものになる¹⁶⁾。そのため実習PFの目的やその効果について学生の理解を促すよう、積み上げ学習の達成状況を学生と共有するかかわりと学科教員の共通理解を促す機会を持つ必要性が示唆された。

2. ピアリフレクションの成果

実習PFと共にピアリフレクションを取り入れた結果、9割の学生が実習体験を振り返る機会として役立ったと回答した。3年次、4年次と繰り返したピアリフレクションでは4つの成果が認められた。1つ目は【自らの学びを積み重ねながら成長する過程を実感する】で、学生は実習PFを資料として自分の体験を客観的に見返すことで、多くのことを学んできた過程に気づくことができていた。これは、自分の学びの意味を見つめるもう1人の自分の目「メタ認知能力」⁵⁾が養われていたと考える。2つ目は【自分の変化を見出し自ら評価する】で、実習で乗り越えた試練を省察し自己開示することで、自分の頑張りを内面的変化として捉えていた。これは、メタ認知能力の高まりが客観的に自己発見するという「自己覚知」¹⁷⁾を促したためではないかと考える。3つ目の成果は【他者との共有から経験した看護を価値づける】である。学生間で体験をシェアすることで、学生は本音を表現・主張しやすく、相互に「他者の表現や主張を受け入れる能力（他者受容）」¹⁷⁾を高め合っている。また、「代理的経験」によって新たな視点で看護を意味づけ、課題を見出すことができていた。さらに、他者承認を得ることで達成感や自己効力感の高まりが認められた。前田らは、学生同士のシェアリングは「代理的経験」や「言語的賞賛」を得ることにつながり、自己理解に加え、自己効力感を高める効果が期待できる¹⁷⁾としており、これを支持する結果といえる。

4つ目の成果は【自ら目指す看護観を醸成していく】である。これは、ピアリフレクションを繰り返す中で自己の看護観を確かめ、将来に対する目標を定めるなど看護専門職としての準備性を高めることにつながる成果といえる。また、自ら看護体験を言語化して残す必要性が理解できており、自己教育力の向上に寄与すると考えられる。

これらの成果を生み出したのは、ピアリフレクションが「構成的グループエンカウンター」¹⁷⁾となっていたからではないかと考える。「構成的グループエンカウンター」¹⁷⁾とは枠を与えられたグループ・エクササイズ体験・時間のなかで、体験をシェアし、メンバー相互の自己開示による自己発見をねらいとする方法である。我々が設定した枠組みは、これから経験を共にする実習グループとし、実習PFを見返し資料とすること、学生だけで自由に語り合うこと、看護技術の到達度と印象深

い・成長を実感した経験を振り返ること、深い理解を促す質問と承認メッセージを送る等を90分で自主運営するように設定した。これらの枠組みを設定したことで、学生同士の主体性に任せた体験のシェアにつながり、自己理解に加え、自己効力感や自尊感情を高める効果をもたらしたと考える。

3. 実習PFとピアリフレクションの今後の課題

実習PFを用いて実感できた成果がない者は5.4%、ピアリフレクションは役に立たなかった者が10.8%存在した。学生の意見には、実習PF記入の時間確保と記入の促しを教員に求めており、学生の主体性だけでは記述の習慣化は難しい現状がみえた。またピアリフレクションでは、時間が経過し具体的なエピソードを想起できないという意見があり、実習PFに看護経験を詳述できず個人レベルのリフレクション不足が懸念された。加えて、他者との感情交流が苦手、自己開示が難しい等の課題のある学生の存在も推察できた。

以上のことから、実習PFが有効に活用され効果的なピアリフレクションを行うためには、実習PFを記載する時間と環境を確保する、目標となる身近なモデルを示す交流の場作り、他者からの承認を得る仕掛け作りなど学生の主体性を促すアプローチが求められる。このような教育方略は、その位置づけや活用方法を教育課程に関わるすべての学習支援者が認識を共有することで効果が保証される⁸⁾とされている。そのため本学では大学法人中期計画の教育分野の具体策に位置付けると共に、学科FD研修として活動報告の機会を設けた。今後も各々の教員が行っている支援方法や工夫例を集め、学生と教員の負担感がなく取組み易い方策を検討するなど、実習に関わる領域担当教員が自由な裁量と工夫をもって実習PF活用の推進に努めるよう看護学科の組織的・体系的取り組みを継続したい。

引用文献

- 1) 深田あきみ, 新橋澄子, 下高原理恵, 他 (2015): 学生のリフレクションを促す経験型実習 主体的に学ぶ力を育成するための取り組み. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 25(1), 11-18.
- 2) 箕口ゆう子, 柴田美恵子 (2015): ポートフォリオとルーブリック・リフレクションを用いた実習の自己教育力育成への影響—基礎看護学実習後の学生の自己評価と自己教育力測定尺度から—. 平成26年度日本看護学会論文集 看護教育, 67-70.
- 3) 前山直美, 石川智子 (2016): プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3, 7-14.
- 4) 久野暢子, 網木政江, 藤澤怜子 (2017): 基礎看護技術教育での学生の学びの深まりを促す教育的介入の検討—ポートフォリオの導入—. 山口医学, 66(3), 153-161.
- 5) 安川仁子 (2007): 看護教育におけるポートフォリオの活用 学習のプロセスを重視した評価. 看護教育, 48(1), 18-23.
- 6) 鈴木敏恵 (2017): 『AI時代の教育と評価』. 教育出版, 東京, p35-41.
- 7) 江崎ひろみ, 窪田志穂, 宮宇地秀代, 他 (2016): 自己教育力を高める「実習ポートフォリオ」の開発 学生と教員の協働によるアクション・リサーチ. 愛媛県立医療技術大学紀要, 13(1), 21-29.
- 8) 坂上明子, 谷本真理子, 増島麻里子, 他 (2013): 看護実践能力自己評価ポートフォリオの改訂に向けた取り組み. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 35, 15-20.
- 9) 野村美千江 (2018): 実習指導の原理—公衆衛生看護学実習が授業として成立するために. 保健師教育, 2(1), 10-18.
- 10) 石井宏美, 小椋絃枝, 羽村愛実 (2009): 看護基礎教育における臨地実習を振り返るグループミーティングの評価—4年生による『成長実感体験シェアリング』の試み—. 愛媛県立医療技術大学平成21年度看護研究抄録集, 21-21.
- 11) 文部省中央教育審議会教育内容等小委員会 (1983): 中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告, 文部時報, 26-43.
- 12) 小西友七, 南出康世, 編 (2006): ジーニアス英和大辞典 大修館書店, 東京, p1619.
- 13) 佐伯綾香, 才野みゆき (2019): 看護学生の実習ポートフォリオに対する取り組みの実態. 愛媛県立医療技術大学平成30年度看護研究抄録集, 29-30.
- 14) 上田修代, 宮崎美砂子 (2010): 看護実践のリフレクションに関する国内文献の検討. 千葉看護学会誌, 16(1), 61-68.
- 15) 田村由美, 津田紀子 (2008): リフレクションとは何か その基本的概念と看護・看護研究における意義. 看護研究, 41(3), 171-181.
- 16) Langan, L., Prendergast, M. (田村由美訳) (2008): リフレクションとポートフォリオの看護実践における活用 学生の看護経験から. 看護研究, 41(3), 213-216.
- 17) 前田ひとみ, 津田紀子 (2008): 構成的グループエンカウンターとリフレクション. 看護研究, 41(3), 217-227.

要 旨

看護学科における実習ポートフォリオ（以下、実習PFとする）とピアリフレクションの取り組みを報告し、継続的な学習支援の成果と今後の課題について考察する。

実習PFとピアリフレクションは、継続的かつ全領域横断的な取り組みとして必修科目に位置づけている。実習PFの活用を促す取り組みでは、上級生による学生の視点を活かした使用法のガイダンスや、定期的に記載活用機会を設け、教員による記載方法の教示を行った。ピアリフレクションは、3年次と4年次に、学生同士で実習PFを用いて看護体験をシェアし意味づけ、承認メッセージを送る方法とした。

実習PFを用いたピアリフレクションの成果として、学生の約9割は実習の振り返りに役立ったと回答した。また、メタ認知力が育成され【自らの学びを積み重ねながら成長する過程を実感する】こと、自己開示によって【自分の変化を見出し自ら評価する】こと、さらに、【他者との共有から経験した看護を価値づける】ことで自己理解に加え、自己効力感の高まりと【自ら目指す看護観を醸成していく】ことが示唆された。以上の成果は、実習に関わる全教員が認識を共有することで効果が保証されると考えられ、今後も組織的・体系的取り組みを継続したい。

利益相反

本論文には利益相反に相当する事項はない。